

2. 研修報告

山口大学附属農場および民間の有機農業

長野幸男 松元里志 野村哲也 木山孝茂

研修地 山口大学農学部附属農場（山口県山口市大字吉田1677-1）

宮田正樹氏農場（山口県楠木町吉部）

- 目的 1. 附属農場の管理，運営について
2. 学生実習の実態について
3. 有機農業及び無農薬栽培の可能性について

日程 平成7年2月21日～23日

1. 山口大学農学部附属農場

山口大学農学部附属農場（以下、農場）は大学本部・農学部と同一敷地内に位置し、園芸、果樹、畜産の3つのセクションで構成され、水田450a、畑390a、果樹園430a、花木園340a、放牧園560a、採草樹林地610a、合計2,780aである。技官は8名で、年齢構成は50代4名、20代4名である。

管理棟は農場の中心にあり、主な栽培作物は水田では普通期水稻、山の斜面にある果樹園ではクリ、モモ等である。獣鳥害を防ぐために山の斜面を利用したネットの張り方が工夫されていた。ガラス温室ではバラの栽培、畜産では黒毛和牛を生産、肥育用として20頭飼育していた。

学生実習は3年時に各学科毎に、それぞれ各セクションでなされていた。農場が学部に隣接しているため、学生による利用頻度が高く、農場への移動時間がいらないため実習も効率よく行われていた。

特徴的な印象は、農場の規模は小さくても、統合・集約されたメリットを生かし、少ない技官数で管理運営されていた事である。鹿大の農場も将来的には統合しなければいけないと感じた。

鹿大と同様に山口大学でも技官研修を行っており、将来は山口大学、広島大学、岡山大学の3大学合同の技官研修を検討中との話であった。

2. 宮田正樹氏農場

宮田正樹氏は鹿大農学部卒業後、海外青年協力隊としてアフリカのセネガルで2年間の現地農業技術指導を経て、現在の地で有機農業を営んでいる。農場は山深い斜面にあり、養鶏及び水稻栽培を行っている。養鶏は地鶏の平飼いで240羽飼育しており、有精卵の生産及び販売を行っている。

飼育上の注意点として、飼養数を3.3㎡当たり10羽以下に抑え、密飼いによる鶏へのストレスを緩和している。また、獣害の防止の為に、鶏舎の周囲に深さ30cmまでに波板を入れている。

資料は一般に利用している配合飼料を極力控え、自家配合飼料や、残菜等を与え、コストダウンに努めている。鶏舎の敷料は苧殻を使用し、鶏糞は粉々になるほど乾燥しており、鶏舎独特の臭いは全くなかった。

生産された有精卵は殻はとても固く、卵黄は箸で搦んで持ち上げられるとの話で、山口市内や宇部市内で1個35円で販売しており、評判は上々とのことだったが、廃鶏の販売に苦心していた。

水田は湧水を利用した急な山の斜面にある棚田で、狭く機械化も困難な場所である。数年前に町の農道整備事業で水田の近くまで軽トラックで行けるようになり仕事が楽になったそうである。無農薬栽培に心がけている宮田氏は除草剤を使用せず、除草は全て人力により行っているが、雑草の中でもヒエが多く、ヒエ対策が1つの課題となっている。

農場の土地は全て借地で、今後少しずつ借地面積を増やし、養鶏も現在1棟の鶏舎を2棟に増築して軌道に乗せたいとの話だった。

宮田氏は「現在1人で有機農業に取り組んでいるが、これから1人でも多く仲間を増やして、販売網を拡大し、コストダウンに努めたい」と語った。

この農場を見学して、農業の本来の在り方、今後の在り方を宮田氏に教えられた気がした。